

豊後大野市千歳公民館「ひょうたんカレッジ」(令和4～6年度)

① はじめに

豊後大野市は大分県の南西部、大野川の中・上流域に位置し、人口は約32,000人である。「一般社団法人ここからプラス」が令和3年度より市内公民館及び体育施設の指定管理事業を行っている。

県内初の公民館講座のモデルとして、県内外からの視察も多く受け入れており、公民館講座の普及に貢献するところは大きい。

② 令和4年度 of 取組

A. 事業をはじめるにあたり

	連携相談	説 明
基本構想	公民館 + 社会教育課 + 社会福祉課	○公民館らしさ ○無理のない内容 ○支援者確保
情報交換	公民館 + 社会教育課 + 社会福祉課 + 自立支援協議会	○付き添い・送迎 ○対象選定（絞る） ○みだしなみ等 ○ニーズ・視点
実施相談	公民館 + 社会教育課 + 社会福祉課 + 近隣の作業所	○障がいがある方の、意見や希望を反映

イ. 運営体制

	説 明
方向性	・参加者への配慮、理解しようとする気持ちを意識 ・関係者全員の学びの場、一緒に学ぶ姿勢 ・事前に配慮すべき点を確認
協力体制	・地区社教会議で「協力者」募集依頼 ⇒個人的な声掛けで最終的に5名確保 ・市役所関係部署に「支援者」として協力要請 ・協力者・支援者がわかるようビブスを着用
その他	・会場：ユニバーサルデザイン、広い駐車場 ・協力人材確保の観点から平日開催 ・講師との打ち合わせを綿密に行う (参加者情報共有、時間内で完結する内容等)

ウ. 1年目の取組

	日時・テーマ	内 容	参加者数
1	R4/10/4 相互理解	障がい理解	当事者：0 講師：2 協力者：8
2	R4/10/25 アイスブレイク	①卓球バレー ②ボッチャ	当事者：10 講師：2 協力者：14
3	R4/11/29 生活課題と癒やし	①お金についての学び ②癒しの音楽鑑賞と体験(琴)	当事者：9 講師：3 協力者：14
4	R4/12/20 季節の工作とおやつづくり	①正月飾り「門松」制作 ②じりやき(郷土料理)調理実習	当事者：10 講師：8 協力者：14
5	R5/1/23 新しい学び	①スマホ教室 ②ドローン体験、VRゴーグルで災害体験	当事者：9 講師：12 協力者：20

エ. 成果と課題

- 障がいがある方を対象主体とした講座を公民館で始めることができた(当事者延べ38名参加)。
- 地元の特別支援学校や市内社会福祉協議会、事業所と連携し、ニーズを把握して講座を組み立てた。
- 地域の人材を活用し、障がいの有無に関わらず誰でも参加できる講座の開催を目指した。講座以外の場でも声掛けができるようになった。
- 参加者の送迎を兼ねて参加する作業所支援員の存在が大きい。障がいの特性や状況の把握もできた。
- 60分講座の2部制で実施したが、トイレ休憩や振り返り・アンケートの時間がとれなかった。



< 第3回講座「さくらさくら」弾けたね！ >

③ 令和5年度の取組

ア. 2年目の取組

	日時・テーマ	内 容	参加者数
1	R5/7/31 障がい理解	障がい当事者から学ぶ (絵手紙教室)	参加者：5 講師：2 協力者：10
2	R5/8/29 レクスポート講座	・ディスコン ・モルック	参加者：5 講師：4 協力者：15
3	R5/9/26 YouTubeの学び	・地元YouTubeバーから学ぶ ・撮影体験	参加者：8 講師：2 協力者：15
4	R5/10/3 カフェを楽しむ	・ピザづくり ・コーヒー教室	参加者：11 講師：3 協力者：12
5	R5/12/5 五感の学び	・和太鼓 ・ダンス	参加者：16 講師：4 協力者：15
6	R6/1/16 楽しい工作	・ひょうたんランプ	参加者：12 講師：1 協力者：13
7	R6/2/20 みだしなみの学び	・化粧／スキンケア／カラーコーディネート	参加者：11 講師：1 協力者：18

イ. 成果と課題

- 市の保健師との連携により、引きこもりの方が参加できた。徐々に慣れ、楽しむ様子があった。
- 参加者・保護者等のリクエストも反映させながら取り組んだ。
- 「みだしなみの学び」では、あらためて社会で必要なことを学ぶ機会が少ないと感じた。
- 講座の企画以外、材料等の準備、協力者の確保・調整などの見えない部分に労力がかかる。
- 余裕を持った時間運営の希望があった。



< 第7回：スキンケアとメイク、楽しい！ >

④ 令和6年度の取組

ア. 3年目の取組

	日時・テーマ	内 容	参加者数
1	R6/7/16 障がい理解	・マイナスをプラスに転換する ・粘土工作	参加者：8 講師：2 協力者：17
2	R6/8/6 レクスポート	・ふうせんバレー ・テーブルホッケー (小学生交流20人)	参加者：7 講師：5 協力者：30
3	R6/9/3 安全の学び	・災害に向けた学び ・指笛を吹こう	参加者：5 講師：5 協力者：8
4	R6/10/1 料理教室(研修)	・ナン・カレー ・(研修) 情報交換	講師：1 協力者：7 関係者：8
5	R6/11/5 年賀状作成	・絵手紙 (障がい者から学ぶ)	参加者：7 講師：1 協力者：9
6	R6/12/3 健康づくり	・ピラティス	参加者：7 講師：1 協力者：9
7	R7/1/14 楽器の演奏	・和太鼓体験	参加者：8 講師：3 協力者：11

イ. 成果と課題

- 余裕を持った時間の希望があり運営に反映した。
- 自分の新しい面、気づかなかった面に気づけた。
- 地域住民との交流希望があり、子どもとの交流を実現した。
- 移動手段がない場合は参加できない方が多い。
- 作業所などの理解・協力がないと参加は難しい。
- 休日開催を検討したが、参加者・協力者共に参加が難しい状況を確認した。
- 参加の問合せがあるが、新規の個人参加は難しい。

⑤ 今後の方向性

- 交通手段確保の課題を考えれば、福祉分野の障がい者向けの移動サービスにかかる事業などとの連携が望まれる。
- 機会提供の場がたくさんできることが望ましいが経費・運営体制確保の課題があり、実施回数を増やすことは難しい。
- 継続を望む声が多く継続する予定である。

(3) 大分大学生涯学習講座

① 取組の背景

担当の岡田正彦大分大学教育マネジメント機構基盤教育センター教授によると、同センターでは公開講座と公開授業を中心に教育面の大学開放を担当しており、リピーターも多数存在するが、あまり参加していない受講者層（障がい者が代表的）もいることが課題となっていた。また、大学単独で学習機会を提供するだけでは、地域住民全体に貢献することは難しいことから、教育機関や行政、NPO、企業など多様な主体と連携し、様々な内容の学習機会を多様な対象に向けて提供できる「地域生涯学習支援システム」の形成に貢献したいという課題意識もあった。

② 講座のデザインと準備

大学ならではの貢献ができる内容や方法は何かについての検討から始めた。一般的には大学は高等教育レベルの（高度な）専門的・先端的内容を体系的に教えることができることが特徴であるが、通常的手法では障がい者の関心に合致しなかったり理解が難しいことが想定されたりしたため、初年度は講座担当者が障がい者の生活状況や学習ニーズを確認し、どのような内容・方法の講座がよいかを探索しつつ講座を展開することとなった。

教育学部特別支援教育コースの教員に協力・助言をいただくと共に、特別支援学校教員を対象に募集を行い、メンターとして大学生学習ボランティアと連携しながら講座の運営を支援していただいた。

大学生学習ボランティアについては、担当者の授業や関係者の周囲の学生に声掛けを行い、35名という多数の学生に参加してもらうことができた。

講座の広報については、県内特別支援学校高等部3年生と教員、公民館や図書館にチラシを配布した。

③ 令和4年度取組 ※場所はすべて大分大学

	日時	内 容	参加者
1	R4/ 11/12	①開講式 ②ダンス ③自己紹介	講師：3 ボランティア：7 メンター：2
2	R4/ 11/26	①ダンス ②キャンパスツアー	講師：3 ボランティア：8 メンター：2
3	R4/ 12/ 3	①ストレッチ・太極拳 ②グループワーク	講師：3 ボランティア：8 メンター：1
4	R4/ 12/10	①ストレッチ・太極拳 ②グループワーク	講師：3 ボランティア：7 メンター：2

	日時	内 容	参加者
5	R4/ 12/24	①ストレッチ・太極拳 ②グループワーク	講師：3 ボランティア：7 メンター：2
6	R5/ 2/23	①野鳥観察 ②絵画作品制作 (学生が企画実施)	講師：1 ボランティア：4 メンター：3

※すべて参加できることを条件とし、参加登録者は**4名**であった。

・基礎講座とスポーツという二部構成で実施した。スポーツを入口として学生や講師との交流を楽しんでもらいながら、基礎講座で自分の生活や将来やりたいことを考えながらニーズを明らかにしてもらうこととした。ダンス講座終了後、講師が主宰する会で継続的に活動する人が現れたという例からも、学習活動の継続や移行などで学習活動が別の学習活動につながることで、また学習活動の成果を生かすなどして社会参加や社会でのつながりを広げることも狙いとして設定したと考えた。

<受講者の感想>

- ・「講座の回数、1回の講座時間がちょうどよかった」「大学生と一緒に学べた」→「**そう思う**」100%
- ・太極拳やダンスなどをして新しい自分を発見することができ、自分のための勉強になった。(20代女性)
- ・話し合う人と出会えて良かった。(20代男性)

<ボランティア学生の感想>

- ・個別的な対応の在り方やその重要性を感じた。
- ・仕事に対して意欲的で前向きな受講者の方の姿勢が尊敬できると感じた。



< 話し合ったことを学生と発表する受講者 >

④ 令和5年度の取組（ボラ＝学生ボランティア）

	日時	場 所	内 容	参加者
1	R5/ 10/ 8	大分大学教育 学部 技術・美術棟	アートワークショップ ①	受講者：6 講師：1 ボラ：2 メンター：2
2	R5/ 10/ 15	大分大学第3体育館	パラスポーツ体験（ボッチャ、風船バレー）	受講者：6 講師：1 ボラ：5 メンター：3
3	R5/ 10/ 22	大分大学教育 学部 技術・美術棟	アートワークショップ ②	受講者：5 講師：7 ボラ：6 メンター：3
4	R5/ 10/ 29	県身体障害者福祉センター	多様な学び体験（eスポーツやモルック）	受講者：7 講師：1 ボラ：9 メンター：3
5	R5/ 11/ 12	ホルトホール大分、大分駅周辺	まち歩き調査	受講者：7 講師：1 ボラ：4 メンター：3

※1回のみの参加も可とした。1回のみ：4名、全て参加：2名
1年目からの継続受講者：3名

- ・2年目の講座のデザインに向けて打ち合わせを重ね、基本方針として、①大分大学の特性を生かし大学として意義を感じられる講座とすること、②生涯学習講座に関して連携を推進し地域での仕組み作りに貢献すること、の2点を設定した。具体的には大分大学の教育資源を活用すること（大学生、施設、教職員、プログラムなど）や多様な学習者がその特性に応じて学べる機会を広げることを重視することである。

教育学部の廣瀬先生による「各自のペースで制作したいものを制作する」というワークショップは、インクルーシブな講座に向けた取組であり、受講者と学生が「共に学び、楽しむ」姿が見られた。

県身体障害者福祉センターや大分駅周辺の町に「出張講座」を行い、学びの場の拡充を図った。



< 受講証明書を基盤教育センター長から授与 >

⑤ 令和6年度の取組 ※場所はすべて大分大学

	日時	内 容	参加者
1	R6/ 11/ 23	アートワークショップ ①	講師：1 ボランティア：2 メンター：2
2	R6/ 12/ 7	豊後絞り（藍染め）を学び、体験してみよう ①	講師：1 ボランティア：1 メンター：2
3	R6/ 12/ 21	豊後絞り（藍染め）を学び、体験してみよう ②	講師：1 ボランティア：1 メンター：3
4	R7/ 2/ 8	アートワークショップ ②	講師：1 ボランティア：2 メンター：2

※原則すべて参加できることを条件とし、参加登録者は1名。2年目からの継続受講者：2名。車椅子ユーザー1名

- ・教育学部の教員2名による芸術および被服学に関する講座2種×2回とした。豊後絞りの歴史を学び、染色を実際に体験することで、衣服を大切に着るべきだと考えさせられる講座であった。
- ・生涯学習講座に加えて、個々人のニーズに合わせて学習活動を展開することを支援する「個別ニーズ対応講座」を準備している（ボランティアやパソコンの扱い方といった仕事上のスキルなど）。

⑥ 成果と課題

当初は運営側の不安もあったが、いざ実施すると円滑に「学ぶ機会を一緒にできている」という感覚をスタッフや学生ボランティアも実感できた。受講者も幅広く興味関心を示し、楽しみながら参加した。

学生ボランティアは、メンター（特別支援学校の教員）の助言や支援を受けることで、事前の経験や研修なしでも有効に障がいがある方と交流し共に学ぶことが分かった。

ただ、生涯学習講座と別の学習機会との連携・接続がまだ初発的な段階にあること、障がい者の生活圏域や自由時間等を考慮して日常的にアクセスしやすい学習の機会を豊かにする取組が必要だ。

⑦ 今後に向けて

現在は文部科学省委託事業として県教育委員会が支援しているが、今後自走化していく必要がある。

教育機関間の連携や教育と福祉の連携等で障がい者の視点に立ち、生活全体の支援が可能な仕組みづくりに向け取り組んでいくことが必要と考えられる。

(4) 県立青少年の家ワンデイキャンプ

① はじめに

大分県は、県立の社会教育施設として「香々地青少年の家」（豊後高田市）、「^{かかち}九重青少年の家」（九重町）を有している。自然体験、生活体験や社会体験などの体験活動を通して、青少年の健全育成や学校支援の促進を図るとともに、生涯を通じた学びを支援するため広く県民に学習機会を提供することにより社会教育の振興を図ることをねらいとしている。

② 令和4年度の取組

ア.現状

障がいがある方の施設利用については、特別支援学校の宿泊研修や放課後デイサービスでの利用があったが、どちらも指導や支援は学校の教員や事業者の職員・スタッフがっており、青少年の家の職員が障がいがある方を指導したり支援したりする機会はほとんどなかった。

イ.事業実施まで

＜香々地青少年の家の場合＞

(ア)県北地域事前説明会（6/16）

- ・県社会教育課、県障害福祉課、中津・宇佐・豊後高田市の相談支援専門員、青少年の家の所長・担当者が協議
- 豊後高田市事前説明会(6/22)
- ・市役所に赴き、社会福祉課にも説明を実施

↓

(イ)各市で事業所に周知、募集開始

↓

(ウ)希望事業所と連絡調整、下見受け入れ、実施プログラム提案・決定

↓

(エ)実施、振り返り

＜九重青少年の家の場合＞

(ア)関係者協議（7/4）

- ・日田市障がい者相談支援基幹センターにて日田・玖珠・九重を総括するセンター長を含め協議、協力依頼

(イ)以下は香々地青少年の家と同じ流れ

ウ.取組

※「職員」は事業所の職員を指す

	日時・場所	内 容	参加者
1	R4/10/ 1 香々地	・マイスプーン制作	当事者：40 職員：5
2	R4/11/ 7 香々地	・マイスプーン制作 ・プラネタリウム	当事者：18 職員：9
3	R4/11/19 九重	・ハイキング ・プラネタリウム ・バードコール制作	当事者：28 職員：5
4	R4/11/28 香々地	・プラネタリウム ・ネイチャークラフト	当事者：25 職員：9

エ.成果と課題

○県立青少年の家で初の障がいのある方を対象にした講座（ワンデイキャンプ）を実施し、利用者数は計画時想定60人（10人×6回）を大きく上回る139名（うち障がい当事者111名 施設職員28名）であった。

○利用者・職員からは「楽しかった。」「また行きたい。」「普段自発的に話をしない方や関わりをもたない方も作品作りを通してコミュニケーションをとることができていた。」と高評価を得た。

○講座を実施することで、ハード面およびソフト面の課題が明らかになった。

●車いすや歩行器を使用する方は階段や段差がある通路は通れず通路を探すことがあったので、トイレや活動場所までのできるだけバリアが少ない通路を設定する必要がある。

●事業所の職員の方のフォローがあって成立しており、施設職員とボランティアのみでの実施はまだ不安である。



＜ かかちワンデイキャンプ ネイチャーアート ＞

③ 令和5年度の取組

ア. 取組

	日時	内 容	参加者数
1	R5/ 9/22 香々地	・所内散策 ・プラネタリウム	当事者：39 職員：11
2	R5/10/26 香々地	・所内散策 ・プラネタリウム	当事者：16 職員：3
3	R5/11/ 9 香々地	・創作活動（マイスプーン） ・プラネタリウム	当事者：28 職員：10
4	R5/11/11 九重	・ハイキングor工作 ・ペタンク ・プラネタリウム	12 (職員を含む)
5	R5/11/14 香々地	・創作活動（ネイチャークラフト） ・プラネタリウム	当事者：29 職員：9
6	R5/11/21 香々地	・創作活動（写真たて） ・プラネタリウム	当事者：25 職員：10
7	R5/12/ 2 香々地	・プラネタリウム ・軽スポーツ（ペタンク）	当事者：22 職員：8
8	R5/12/ 2 九重	・ハイキングor工作 ・ペタンク ・プラネタリウム	27 (職員を含む)

当日のスケジュール例

10:30	入所のつどい
10:50～12:00	・所内自然散策 ・創作活動（マイスプーンづくり）
12:00～13:00	昼食（弁当、または食堂利用）
13:00～13:50	プラネタリウム
13:50～14:00	退所のつどい

イ. 成果と課題

- 昨年度（4回）を大きく上回る8回実施し、利用者数も前年比224%であった。
- 利用者の希望に応じてプログラムを選択できるようにし、青少年の家職員が指導・支援を行った。
- 活動場所やトイレの位置を考え、無理のない動線を確認し、移動がスムーズに行うよう工夫した。
- 下見や打ち合わせ時間を確保する必要がある。



＜ ここのえワンデイキャンプ ハイキング ＞

④ 令和6年度の取組

ア. 取組

（ア）【継続】「ワンデイキャンプ」（事業所対象）

	日時	内 容	参加者数
1	R6/10/ 8 香々地	創作活動（写真たて） プラネタリウム	当事者：29 職員：15
2	R6/10/15 香々地	軽スポーツ（ペタンク）、 プラネタリウム	当事者：22 職員：3
3	R6/11/ 6 香々地	創作活動（写真たて） プラネタリウム	当事者：5 職員：2
4	R6/11/13 香々地	所内散策 プラネタリウム	当事者：18 職員：6
5	R6/12/ 7 九重	・活動（A B選択） A. 所内散策 B. ネイチャーアート ・プラネタリウム	当事者：3 職員：14
6	R7/ 2/22 九重	・活動（A B選択） A. 展望台散策 B. ネイチャーアート ・プラネタリウム	当事者：10 職員：4
7	R7/ 3/ 2 香々地	創作活動（写真たて） プラネタリウム	当事者：10 職員：4 家族：12

（イ）【新規】「ユニバーサルプログラム」

11/16に九重青少年の家で、主に一般就労者を対象にトレッキング、焚火体験といったプログラムで募集したが、人が集まらず、中止となった。

イ. 成果と課題

- 香々地は「中津・豊後高田・宇佐」の、九重は「日田・玖珠・九重・由布」の障がい福祉所管課や相談支援専門員との連携により、事業の周知や募集を効果的に行うことができた。
- 「マイスプーンづくりはやや難しい」、「所内散策はとても好評である」といった経験を積み重ねることで、プログラムの難度や休憩時間を多くとる必要性がわかり、計画しやすくなった。
- 必要な合理的配慮や事前準備物が明らかになった。
 - ・靴ベラや椅子…靴の着脱の際、あると良い。
 - ・野外活動時の簡易テントやブルーシート…休憩や熱中症予防のために必要である。
 - ・名札…利用者に声をかけやすくなる。
 - ・所内散策時のウォーキングポール…膝への負担を軽減する。

⑤ 今後の展望

一般利用に向け、職員の支援スキル向上や内容の工夫をさらに図りたい。事業所単位の利用に加えて個人や家族単位で参加できるプログラムの開発にも取り組んでいきたい。

(5) 特別支援学校出前講座

① はじめに

「学校卒業後の学び」を支援する事業という性格上、イベントや講座は特別支援学校等を卒業した18歳以上の成人を対象としている。しかし、卒業した方々に情報を届けることは容易ではない。そもそも、「障がいがある方の生涯学習」という概念自体が新しく、当事者の方だけでなく、保護者や支援者、教職員にも事業の趣旨や意義を知っていただくためには、特別支援学校在学中から余暇活動や卒業後の学びについて知り、実際に体験してもらうことが有効であると考え、3年間で出前講座を拡充してきた。

② 実施方法

ア. 年度当初の特別支援学校校長会で出前講座の趣旨を説明し、希望を募る

イ. 実施校を決定し、プログラムを提案する。

講師を選定し、依頼する。

(ア) ワークショップ「卒業後の学びを考えよう！」

(イ) 体験講座

の二本立てを基本とする。

ウ. 講座を実施し、生徒の反応や反省、気づきを次回以降に生かす。

③ 令和4年度の実施

ア. 実施校

	学校	月日	内 容	人数
1	南石垣支援	R5/2/13	①ワークショップ ②フライングディスク ③絵手紙	生徒10
2	大分支援	R5/2/17	ワークショップ	生徒23+ 保護者3
3	大分大学教育学部附属特別支援	R5/2/22	①ワークショップ ②卓球バレー	生徒8+ 保護者8

イ. 成果と課題

○生徒は非常に意欲的に楽しんで取り組んだ。

○教職員や保護者にも「卒業後の学びの場」について知り、考えてもらうことができた。

●実施校が大分市・別府市に偏った。

●依頼時期が遅くなり、卒業式前のあわただしい時期の実施となってしまった。



< フライングディスクで白熱！(南石垣支援) >

④ 令和5年度の実施

ア. 実施校

※ワークショップはすべての回で実施しているため省略

	学校	月日	内 容	人数
1	大分大学教育学部附属特別支援	R5/11/9	絵手紙	生徒5
2	宇佐支援	R5/11/27	①絵手紙 ②ドローンサッカー (選択)	生徒20
3	中津支援	R5/1/15	①絵手紙 ②フットサル (選択)	生徒33
4	大分支援	R5/1/16	①絵手紙 ②ドローンサッカー (選択)	生徒26
5	新生支援	R5/2/13	①ドローンサッカー ②卓球バレー (入れ替わりで全員体験)	生徒27

イ. 成果と課題

○ドローンサッカーや絵手紙など、生徒の興味関心に応じた選択制講座を実施したことで、好きなこと・やってみてみたいことに主体的に取り組む「生涯学習」の理念や良さを伝えられた。

○市町村の教育委員会や障がい福祉所管課、社会福祉協議会と連携して地元の「学びの場」を紹介し、卒業後の余暇活動や学びにつながる可能性を高めた。

○卒業後の学びの場に興味を持ち、配付された資料を持ち帰って家庭で利用できないかと話をした生徒もいたようである。

●県下のすべての特別支援学校(17校)で講座を実施するのが望ましいが、特別支援学校も学校行事が多いことと、講座の企画・運営に労力がかかるため、なかなか実現は難しい。

- 年に1回の単発講座であるため、生徒の印象に残りづらい（中津支援学校では高等部1～3年生を対象に実施できたことは大きい）。
- 特別支援学校の教員も、地域の生涯学習講座の存在や卒業後の学びの必要性について意識が高いとはまだ言えない。教員の啓発も必要である。



< ドローンサッカーに夢中！（臼杵支援）>

⑤ 令和6年度の取組

ア. 取組

※ワークショップはすべての回で実施しているため省略

	学校	月日	内 容	人数
1	大分大学教育学部附属特別支援	R6/10/3	ドローンサッカー	生徒11+保護者1
2	日田支援（同窓会）	R6/10/19	①風船バレー ②バスボム作り（選択）	卒業生39
3	日田支援	R7/1/21	①モルック ②ソルトペインティング	生徒19
4	さくらの杜高等支援	R7/1/29	①ズンバ ②ドローン撮影	生徒31
5	南石垣支援	R7/1/29	①しおり制作 ②チアダンス	生徒11+保護者2
6	大分支援（県身体障害者福祉センターで実施）	R7/1/31	①絵手紙 ②フライングディスク ③卓球バレー ④ドローンサッカーから2つ選択	生徒17
7	臼杵支援	R7/2/4	①絵手紙 ②ドローンサッカー	生徒12+保護者2
8	中津支援	R7/2/18	ストラックアウト&スカットボール	生徒11+保護者2

イ. 成果と課題

- 昨年度の実施校から、「昨年度とても良かったので、ぜひ今年度もお願いしたい」という依頼があった。また、こちらから依頼した学校でも「あの出前講座ですね。やりましょう」と好意的な反応が多かった。
- キャリア教育の一環として扱う学校があった。教育課程の中に「余暇活動」や「卒業後の学び」が入るようになると、より実施に積極的な学校が増えると考えられる。
- 7校で8回実施した。回数、内容ともに1年目と比べると格段に進化した。「実際に学べる場や機会を紹介してほしい」という要望をうけ、地元の取組につなげることを心掛けた。具体的には以下の通り。

- ・大分大学教育学部附属特別支援
⇒県身体障害者福祉センター（大分市）
- ・日田支援⇒市レクリエーション協会、ふうせんバレー協会、すぎのこ村モダンタイムスアート（社会福祉法人すぎのこ村）、東有田公民館講座（日田市）
- ・さくらの杜高等支援⇒「おおいたユニバーサルカレッジ」「ヨカたの」（大分市）
- ・南石垣支援⇒中央公民館「カラフル教室」（別府市）
- ・大分支援⇒県身体障害者福祉センター（大分市）
- ・臼杵支援⇒障がい者さぼーとセンター風車「チャレンジ教室」（臼杵市）
- ・中津支援⇒市社会福祉協議会 障がい児・者余暇活動支援事業「てくてく」（中津市）

- 3年間で一度も実施できていない学校がある。
- 寒い時期に体育館や屋外でのプログラムを実施した。生徒は元気であったが、風邪をひく等のリスクは小さくない。時期と会場、内容を適切に設定するべきだ。
- 「受講後、高等部2年生の生徒が県身体障害者福祉センターの講座を受講するようになった」という例があったが、真に卒業後の学びの場へつながれたかどうかについての追跡調査や具体的・数値的な効果測定は難しい。

⑥ 今後の展望

「学校教育」から「社会教育」への円滑な接続を図るうえで、特別支援学校出前講座は非常に有効であるため拡充を図ってきたが、現行の方法で実施校をこれ以上増やすのは現実的でない。今後は各地域の行政や団体が直接支援学校と連絡調整して出前講座を継続的に実施していく仕組みづくりが必要であると考えます。